

近世における旅行情報誌と現代との接続

——“楽しむ教材化”を視野に——

速水 香織 (信州大学 学術研究院人文科学系)

1. はじめに

近世には、17世紀初頭から幕府による道路ならびに宿駅の整備が進められ、また時代が安定するにつれて、参詣や湯治等を目的とした旅行が盛んとなった^{注1}。そのような状況の中、旅行に関する情報の需要が高まった結果、紀行文や名所記、道路や名所および駄賃などの情報を掲載した小型本「道中記」が盛んに出版されるに至る^{注2}。そして、秋里離島著・竹原春朝齋画『都名所図会』（全六巻、安永九年〈1780〉刊）をはじめとする、書名に「名所図会」の名称を用いる出版物群は、「名所」の範囲が「由緒ある寺社・樹木・岩石や歴史伝説をもつ地に拡充され、海道・宿駅・橋・川などを含めて、実況をも説明し、興味あらしめるような記述となっている」ことが、朝倉治彦氏によって指摘されている^{注3}。これら「名所図会」は、例えば『都名所図会』の場合、旅の目的地の情報を事前に得て、その予備知識をもとに旅先に赴いた事例が西野由紀氏により報告されるほか^{注4}、実用的な目的を離れた、娯楽に供される読み物としても歓迎され、数多くのものが世に出回ったことが知られている。また、同書群に掲載される諸情報ならびに緻密な挿絵は、現在でも観光地などの解説に活用されることもあり、当時と現代とを繋ぐ、貴重な地誌としても位置付けられよう。

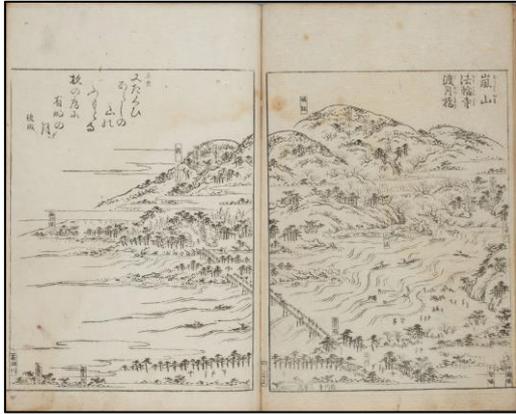
現在、人間文化研究機構国文学研究資料館による共同研究「古典籍画像に基づく ICT 活用教育プログラムの開発」^{注5}において、上述の古典籍を、現代の教育に活用する可能性を探るべく、掲載される情報を用いた教材作成を試みている。本稿では、その一つである秋里離島著『木曾路名所図会』（文化2〈1805〉刊）ならびに豊田利忠編『善光寺道名所図会』（嘉永二年刊〈1849〉刊）を用いたデジタル双六の作成について報告する。

2. 宿場情報の接続——道中記・名所図会の情報と現状との比較

近世における旅行情報誌に掲載される情報は、宿場から宿場までの里程、駄賃情報、宿場の地誌的または歴史的な解説、名所や名物の情報など、多岐にわたる。それに加え、特に名所を視覚化した挿絵が、時期を下るにつれ増加する傾向にあり、特に名所図会には、実景・故事来歴の想像図・土地の俯瞰図等が、それまでの道中記類と比較して、格段に豊富に掲載されている。そしてこのような情報は、同一地点において、当時と現代との共通

点・相違点を比較できるという特性を持つ。

例えば『都名所図会』には、現在の京都府一体の名所情報が載るが、巻四に描かれる嵐山の渡月橋（画像Ⅰ）は、現代にもよくその倣を留めていることを確認できる（画像Ⅱ）。



【画像Ⅰ】『都名所図会』の挿絵^{注6}

【画像Ⅱ】現在の渡月橋（筆者撮影）

一方で、同じく離島編『東海道名所図会』（寛政九年〈1797〉刊）巻一には、絶えず水が涌き出た、往来の旅人の渴きを癒したという著名な井戸「走井」^{注7}が挿絵に描かれている（画像Ⅲ）。しかしながら、この井戸の実物は、現在は非公開となっており、近隣に位置する「走り井餅本家」の店舗入口横に、その名残を示す「走井」が再現され（画像Ⅳ）、旅行者の目を楽しませているという。^{注8}



【画像Ⅲ】『東海道名所図会』の挿絵^{注9}

【画像Ⅳ】「走り井餅本家」に新たに設置された「走井」（筆者撮影）

近世以前から名所として著名な土地、あるいは歴史的イベントや古典の舞台となった土地は、現代においても踏査可能である場合が少なくない。その変遷もしくは共通点を見出す作業は、知的好奇心を喚起し、多様な学びの素材として地域の歴史や文化に関する教育活動の充実化に活用し得る可能性を持つ。この可能性に着目し、本共同研究では、近世の地誌による教材作成を着想した。

3. 近世旅行情報を活用した教材作成の可能性

本共同研究では、文部科学省が推進する GIGA スクール構想^{注10}を視野に入れた ICT 活用教育ツールの開発を試みている。教材そのものは、古くから用いられた伝統的な遊具、すなわち「双六」の形をとる。これは、学校教育の現場での使用を想定した教材としてのみならず、世代を超えて娯楽、あるいは知的欲求を満たしながら親しむことのできる、主体的・対話的な学びを実現し得る教材の開発を目指していることによる。

本教材は、近世において江戸と京都とを結ぶ重要道路のひとつ中山道の宿場ならびに洗馬から善光寺を頂点として追分に至る善光寺街道、そして江戸から日光に向かう日光街道にある地名をマスとして、江戸から京都に向かう形をとって構成する（画像 V）。



【画像 V】『木曾路双六』の全体像

マスは、宿場の持つ情報によって、以下のとおり 3 種類を設定する。

四角マス…中学校・高等学校で扱われる古典作品に登場する土地、または宗教的に著名な土地。

楕円マス…近現代作品の舞台となる土地、また歌枕と認定されるような、古典的知名度の高い土地。

丸マス…それ以外の土地。

プレイヤーは、盤上の分岐点においては、どちらのルートを選択してもよい。ただし、盤上には、4 箇所程「〇〇コマ進む」という指示が最初から表示されているが、四角マスまたは楕円マスにコマが止まると、そこで初めて様々な指示が表示される設定となっている（画像 VI）ため、単純にマス数の少ないルートが有利とは限らない。

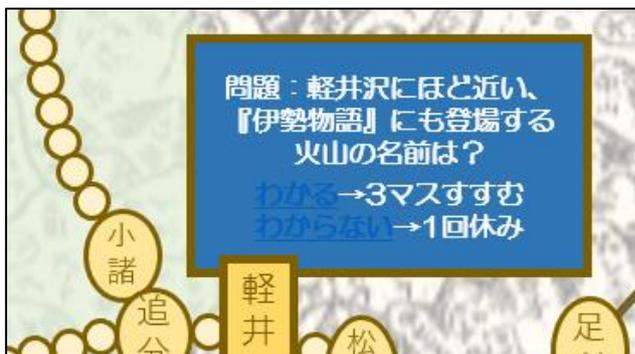
例えば、スタート地点の江戸から二番目に位置する四角マス「熊谷」に止まると「筑波山の雄大な姿に見とれて 2 回休み」と指示が表示される。これは、熊谷から実際に筑波山を目視できることから設定されている。また、スペースの関係上、丸マスには地名が表示されていないが、コマが通過する際に地名が表示されるようになっており、地理情報の理

解へ配慮している。



【画像VI】 コマを進めた時に出る表示

このような仕掛けは、コマ移動の指示だけでなく、例えば（画像VII）に示した、江戸から三番目の四角マス「軽井沢」では、古典にまつわるクイズが表示される。ここでは「軽井沢に ほど近い、『伊勢物語』にも登場する火山の名前は？」という問題が表示されている（正解で「3 マス進む」間違えれば「1 回休み」）。



【画像VII】 大マスに表示されるクイズ

また、クイズに貼ってあるリンクをクリックすると、正解の情報を閲覧することができる。ここでの正解は「浅間山」であるが、リンク先の画面では、解説文に加え、近世において描かれた浅間山の図と現在の同山の画像、および関連する古典籍の画像（ここでは『伊勢物語』）を確認することができる（画像VIII）。そのまま双六に戻ることもできるが、学習の段階あるいはプレイヤーの興味の持ち方によって、関連する古典籍『伊勢物語』の第八段本文を表示させることもできる構成となっている。



【画像VIII】 正解と関連情報の表示画面

このように、土地にまつわる歴史的・文学史的情報を階層化した、クイズ形式による問題を、すべての四角マスおよび楕円マスの大部分に配置する（楕円マスには、一部別の指示を含むものも配置）。これらは、画面が煩雑になることを避け、またプレイヤーの双六に対する興味を喚起するべく、マスにたどり着いた際に初めて表示される。そして、リンク先に解答を表示するが、学習の段階や学習者の興味の方向性によってはそれに留まらず、段階的に情報を提供する仕組みを採る。さらに、そこから土地にまつわる情報を独自に調査する等の課題に発展させることも視野に入れ、教材作成を進めている。

なお、本教材のうちクイズの正解画面に用いる関連画像を収集するにあたっては、国文学研究資料館が構築した新日本古典籍総合データベース^{注1}が極めて有用である。本データベースは、日本語で記された歴史的典籍約30万点を画像データ化し、書誌情報データベースと統合した検索ツールで、キーワードによる画像検索が可能となっている。画像Ⅷでは正解の浅間山の図を、谷文晁画『日本名山図会』（文化九年〈1812〉刊）から採用しているが、本画像は、同データベースの検索により見出したものである（画像Ⅸ）。



【画像Ⅸ】国文学研究資料館 新日本古典籍総合データベースの検索結果画面（下に【画像Ⅳ】で使用した『日本名山図会』の情報が見える）^{注1}²

4. おわりに

近世に数多く出版された旅行情報誌、特に名所図会は、土地にまつわる故事や古典に加え、現代に通ずる地理的情報また豊富な挿絵を掲載している点において、様々な観点から学習者に学びの機会を提供する教材として活用できる可能性を有している。今回は、まずは「楽しむ」ことから始める教材としてのデジタル双六の開発について報告したが、実際に教材として使用する段階に至った際には、改めてその効果と課題について報告したい^{注13}。

【註】

1 近世における旅行および中山道に関連する旅行情報誌については拙著「中山道関連書籍の出版に見る三都本屋仲間の相克」（『近世前期江戸出版文化史』文学通信 2020）参照。

2 「道中記」とは、岸徳蔵氏により「旅路の宿駅・問屋名・里名・駄賃・名所旧跡などを記して、旅人のしるべとした実用的小本を指す」（『道中記』『丙辰紀行』『東海道名所記』）〈『仮名草子と西鶴』成文堂 1974、初出『静岡女子短期大学紀要』6号、静岡女子短期大学 1960）参照）と定義づけられる。

3 『日本古典文学大辞典』第五巻 p. 694（小学館 1984）による。

4 「先達はあらまほしき：「名所図会」と旅人」（『國文學論叢』52号、龍谷大學國文學會 2007）参照。

5 共同研究者に、宮本佑規子氏（白百合女子大学）、中村綾氏（愛知学院大学）、作業協力者に、時田紗緒里氏（苫小牧工業高等専門学校）、岡島由佳氏（青山学院大学）。

6 国文学研究資料館，DOI：10.20730/200005270，

URL：<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200005270/viewer/215>

7 『東海道名所図会』には「走井 逢坂大谷町茶店の軒端にあり 後の山水こゝに走り下つて涌出る事 瀝々として寒暑に増減なく甘味也 夏日往来の人渴を凌ぐの便とす」とある（国文学研究資料館蔵本〈請求記号：ヤ 6-37-1～6〉による）。またこの井戸は、歌川広重画「東海道五十三次」の「大津 走井茶屋」にも『東海道名所図会』同様、名物餅・走井餅を販売する茶店の脇で清水が迸る様子が描かれるなど、著名な井戸であったことが知られる。

8 「走り井餅本家」は、現在「井筒八ツ橋本舗」追分店（滋賀県大津市）内に店舗を構える。「走井」の現状についての情報は、同店舗スタッフの方にご教示戴いた。

9 国文学研究資料館，DOI:10.20730/200005279，

URL：<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200005279/viewer/22>

10 令和時代のスタンダードな学校像として、全国一律の ICT 環境を整備，すなわち 1 人 1 台段松及び高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備し，多様な子どもたちを誰 1 人取り残すことなく，公正に個別最適化された創造性をはぐくむ教育を持続的に実現させる構想。

11 国文学研究資料館が中心となって推進する日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画において構築されたデータベース。複数の機関が所蔵する古典籍情報および高精細画像の検索が可能。

詳細は <https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/database.html#section01> を参照のこと。

1 2 新日本古典籍総合データベースの検索画面 URL : <https://kotenseki.nijl.ac.jp/?ln=ja> 。

1 3 双六の実用化にあたっては、学校現場で使用する場合を想定し、各四角マス・楕円マスに関する概要・歴史的情報・文学史的情報・トリビア情報・関連書籍情報を掲載した副読本を作成予定である。

【付記 1】 本稿は、第 7 回日本語の歴史的典籍国際研究集会「歴史的典籍と教育——デジタル画像を教育に活用する」（オンラインによる開催、2021 年 11 月 11 日）において「古典と地域を結ぶ ICT 活用教育の可能性——楽しみながら学ぶ『木曾路双六』『ことわざ絵合わせ』——」と題し行った口頭発表に基づき、加筆修正したものである。また本稿は、人間文化研究機構国文学研究資料館歴史的転籍 NW 事業協同研究の成果の一部である。

なお、発表時の動画は、現在 YouTube で視聴可能である。

(URL: <https://www.youtube.com/watch?v=aQPF4IxeSWk&list=PLQoNnHe69dCMq6Hn9wErwqrH6ZPh9gxNp&index=5>)

【付記 2】 本稿脱稿時において国文学研究資料館 HP 上で公開されていた「新日本古典籍総合データベース」は、令和 5 年 3 月 1 日を以て「日本古典籍総合目録データベース」と統合の上「国書データベース」として稼働を開始している。詳細は以下の URL を参照戴きたい。

(URL: <https://kokusho.nijl.ac.jp/>)